

平成24年(第6回)みどりの学術賞 選考委員会委員長コメント

平成24年(第6回)みどりの学術賞の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術に造詣の深い学識経験者等約430名に対し、この賞にふさわしい候補者の推薦を依頼しました。その結果、約60名の推薦が得られましたが、分子・細胞レベルで植物の営みを研究している方から、地球規模で生態系の研究をしている方まで、実に多様な分野からお名前が挙がり、改めて「みどり」という言葉のもつ幅広さ、奥深さを思い知らされた次第です。

選考委員会は約半年をかけ、推薦のあった方々の業績を精査・検討した結果、最終的に2名の方を推薦することといたしました。お一人は、従来存在しないと考えられていたイネの細胞質雄性不稔系統を4品種のイネから発見し、雑種イネを育てるための基本材料を開発して、中国などにおける雑種イネの育成や米の増産に大きく寄与された新城長有博士であり、もうお一人は、洪水や山崩れなどの地表変動攪乱が、森林、河川、湿地等のさまざまな生態系の維持機構として重要な役割を果たしていることを明らかにし、生物種と生育環境を基準にした生態系評価と復元の方法を確立した中村太士博士であります。

今回の受賞者お二人の研究は、極めて優れたご業績であるとともに、いずれも我々人間と自然が「みどり」とどのように関わり生きていけばよいか、その道筋を示した研究という点において共通しており、ここから学ぶことも多いのではないのでしょうか。選考委員会を代表し、両博士の永年にわたるご貢献に対し、心から敬意を表するとともに、このような「みどり」に関する学術が様々な知恵をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成24年3月2日

みどりの学術賞選考委員会委員長
杉浦 昌弘